

井上政子「たひのに記」(他飛廻珥記) (翻刻)

倉敷古文書の会 田中 鈴

都の行かひ

秋たたば都へとかねて心かまへしつれど のこるあつさの
しぞき侍らねば 道のほどもくるしからむとためらうほど
にやがてはづきにも也ぬ いまはと思ふに 日ごとに空か
きくもり折々はあめいたくふりて いつはるべくもみえね
どこころのすゝむ方にいそがるれば よしやとて常之もろ
とも中の五日の明ばのに出たつ けふも猶そらかきくれて
雨そぼふれり さとばなれにくれば 雲やうすらぎては
どなく日かげのみゆるに

行くまゝに雲まそひつゝ山のはに

にほふ日かげをみるがうれしき
な津河といへるさとしばしやすらひて たちいづる頃
にはかに空くらくなりて雨いたくふれり ずさとしとど
にぬれて道のぬかりもいとくるしげなり のりたるものに
あまつゝみせむなどいひさわぐほどに またはれわたりて
いまゝでみしくもゝ遠こち行わかれつつありし空ともみへ
ず いとうれしくこよひは月もさぞとおもはれて
めくりあふ秋のこよひの月をしも

いづくのさとにやどりてかみん

かうひとりごたるゝにまたふり出ぬひ日とひかゝりければ

千早振かみな月にもあらなくに

ふりみふらずみさだめなきそら

申のときばかりより風ないで空はれ 日かげもにほひやかなれば

残りなくもふきはらへ秋の風

名におふ月のひかりみるべく

いくたびとなくかうやうにてくれぬ 船はしとかやいへる
さとにやどれり くれぬれば空いよゝ晴わたりて月いとさ
やか也 あまりのうれしさにうちいでんことのはもなくた
だうちあふぎてながめつゝ

露もわがおもひかけきやこよひしも

かくさやかなる月をみむとは

いぶせきはにふのこやなれど なかくやうかはりて哀ふ
かし いりてねぬべくもあらねば ちまたにたち出るに夜
はふけにたれど あやしげなる賤のをどもが遠近行かふに
うかれつゝ賤もやめづるさよ更て

月すみわたる船はしのさと

ずさどもをいたくつかれぬらむに 心なきわざなめりとあ
かぬ心ちしつれと ねぬればなにくれとふるさとのことの
みおもひつゝけられて

立いでゝまたほどもなきふるさとを
したふやたびのこゝろなるらん

かうはいへどけふのみにやつかれけん しばらくうまい
しつゝ鳥の声におどろかされて つま戸をしあければそら
はちりばかりの雲もなくひるともいふばかり也

家ならばおき明してもみるべきを
いぎたなかりしあた夜の月

暁かたやどりをいづ けふは 日ひとひ空はれわたりて行
ゆく野山のけしきも見わたさるれば心なぐさみぬ はりま
のうね山をこゆるとき

ぬれて来しきのふの雨にくらぶれば

宇年の山坂うしとしもなし

その山のふもとにやどる 今宵も月さやかなり
しばしたゞいさよふのみをけぢめにて

きぞにかはらぬ山のはの月

卯の時ばかりやどりをいでて 姫路のまちをすぎ二里ばか
り行てやどりぬ またの日ひるつかた 加古河のうまやに
て加古の松といへるは道の行手なれば こかけに行て

立よればわが身の老ぞはづかしき

もとみしまゝのかこの松かけ

あかしのうらにきてやどる

十九日行ゆきて須磨のうら辺をすぐるに うみのおもては

るばるとなぎわたりて 淡路島山の見わたしいとけうあり
名にしおふ月のよ頃をここにきて

みぬこそすまのうらみ成けれ

津の国生田の森のわたりを過侍るに けふは此御社の神わ
ざとて いとおほくまうずる人 道もさりあへず されど
日もかたぶきぬれば 心ざすやどりに暮れぬ先にと ずさ
どものいそげばせんすべなくて

いそがずばぬさまつらんを折にあふ

生田の森の秋の神わざ

くれかゝる頃 いはらすみよし とかやにきつきて枕をか
る またの日もとく出てひるつかたことなく難波につき侍
りぬ ひとひふたひとまりて 末の三日暮はてゝ河船に
乗れり 旅人のあまたつどひてうかはしきに あめさへ
ふりぬれば夜たゞいもねずて

苦くざるあめのしづくもわびしくて

あかしかねたるよどの川ふね

水もいとおほく雨も降ければ船とりわづらひて 明る辰の
時ばかりに伏見のさにつく ぬれたる衣あぶりなどしつ
つ京に行に 雨いといたうふれど 今しばしがほどとおも
へばくるしとおもはず 午過る頃しるべの方にきつきて
心もおちい侍りぬ またの日はいたくつかれぬれば 日ひ
とひやすらひくらしつ 其またのひ師の君の御もとにまか

この中にこめられて いかにくるしからむとおもへば お
もしろかりしころもうせて侘しくさへなりぬ

ちさと行つばさも今はかひなくて

なれし雲井を述つゝやなく

かうやうのこといひたはぶれつゝかへる
廿七日けふはいづち行へくもおもほへず たゞ師の君のみ
やまひのみおぼつかなく思ひつゝあるに 夕つがたいざ給
へとて 常之にいざなはれて四条の河辺をうかれ行に
はかに空かきくもりかみさへなりいでぬればいとわびし
いかにせんとて たゞいそぎにいそぎつゝ三条大路をかへ
るに 神はおどろくしくもあらねど いなづまの光ひま
なくひらめきてものおそろし かうくしてかへれば日も
暮はてぬ 明れば末の八日也 田山氏をとぶらひまいらせ
ければこそ思ひかけずよくこそとて ねもころに物語し給
へず 此ころのうさもしばしわすれぬ

十と世あまりへだてきつれど逢みれば

へだてなきこそうれしかりけれ

かくいひ出れば御かへし とみに

十とせあまりふた心なきことののは

ともに逢みるけふのうれしさ

こは十とせあまり二とせありてまみえまゐらせければ也
廿九日未過る頃より あるじのめ 常之ともなひて四条

りけるに 此ころ御こゝちのれいならずおはしますとて
まみへたてまつらず いかにともせむすべなくてさらば前
波翁をとひまゐらせて とし月へたゞりしみものかたりも
申うけ給はらばやとおもひつゝ行に そもまたはやくより
ふるさとにくだり給ひぬとていまさず むなく立かへる
道すから かうといはるゝ

かたかたに思ふことのみたがへれば

ものわびしかるけふにも有かな

やがてかへりぬれど心ゆかずはしつかたに出てながめつゝ
あるに あるじの母刀自よりきて さのみなわびさせたま
ひそ 師の君の御いたつきもほどなくおこたらせ給ん か
うのみながめおはさむより いづちもくともなひまゐら
せんとて せちにそゝのかさるゝもいながたくて いづ
こを心ざすともなく立出れば いさゝか心なぐさみぬ さ
らばとて祇園の御社にまうでゝ

なにをかもぬさと手向む此神の

そのふの木々はまだみじせす

なほくるべくもあらねば 真葛がはらをうそぶきありくに
いとおほらかなるいへに 行きの人のらうがはしくたちこ
みてやすらふをいりてみれば 園ひろくつくりてからのも
やまとの鳥をいときはにつどへたる也 おのがさまく
さへつりかはすが珍らしうをかくして 見めくるに かく

の河辺なるわざをぎみむとて行 日暮てかへれり
 晦日岡崎に行てむかしの友をとふ 先師のすませ給ひし庵
 のほとりにたちよりてみれば ませし世に明くれめでさせ
 たまひし松は猶ありしまゝ也 とりくおもふことのみお
 ほかり

とひよれどもものいひかはすよしもなし

まつをむかしのしるひにして

とこしへにかはらぬ色もあはれなり

きみなぎやどの庭の松がえ

明ればいつしか長月朔日也 ふるさとなるうぶすなの神わ
 ざ けふなめりとて心ばかりのほぎこととして 比喜多氏の
 主きたり給へといひやりつゝ さかづきの数つもりぬ
 二日けふ日かげのどか也 是かれうちつれて此ころみぬわ
 たり見ばやと またわざおぎ見に行 夕つかたかへらまほ
 しかりけれど ひとくのなほくといふにまかせて暮るまで
 みて帰る

三日師の君いかゞせさせ給ひつらんと とぶらひまるらせ
 ければ きふけふ御こゝちもやゝさはやぎたまひぬとて
 たいめたてまつりければ 世におもふことなきこゝちして
 になくこそうれしかりけれいつかはと

思ひし君にけふはまみえて

御かへし

へばかへりぬ

四日いづちへも行ず させる事もなく暮ぬ

五日ひるつがた 前波翁の此ころふるさとより帰らせたま
 ふとてとひたまふ しばしの物がたりせさせたまひて

猶かたらはまほしけれど えさらぬことの有てこと方に行
 ば またなんとてかへらせ給ふ けふは師の君のまねかせ
 たまへば 未の頃より常之もろともまかるに なにくれと
 ねもころにあるじせさせたまひつゝ さかづきあまたらひ
 になりて亥過る頃までありてかへる

六日時日の御いやもきこへたてまつらんとて師の御もとに
 まかる 御物語はてゝ 是よめ我もよまむとのたまひて題
 三つ給はる

七日雨ふりていとさびし きふ給はりし題のうたよみな
 どしてくらしぬ 其うた

秋雨

秋ふけて野わきだちたるかぜまぜに
 さむさもよほす夕ぐれのあめ

くり

うなひ子がひらふ柴くりしばしばも
 あらしにつれて落そはりつゝ

栽菊

菊植て花まちわぶる久しさは

珍らしききみ待みれば此ころの
 やまひもすでにいゆかとぞ思ふ
 またあなたより

「いにし春の頃ほひよりあまたゝびせうぞこたひしを え
 さらぬことの身につどひて 心ひとつをちぎにくたくから
 なにやくれやとおくれにたるを さすがにいくたりばかり
 のものはかいてもやりつぞ このみ心ぎしにこたへんは
 おほ方にやはとおもふあまりに さしおかれつゝ秋もなか
 ばすぎぬ さるは病がちにて 心にもあらざるおこたり
 わざとおぼして ゆめかたゝよりにすぐすとながめたま
 いそ こたひのたいめには ちくらのおきともすべうこそ
 はま千鳥おりこそたゝねこゝろあるを

ふみたえにきとらみざらん

かくかいつけて出させ給へば とりあへずことは春の頃
 より御せう息もうけ給はへらねば いかにしつることぞと
 思ふあまりにうらみ奉りけるに なにやくれやと御心のお
 ちあぬ 御ことどものつどひて 何事もおこたせたまひ
 つるとて けふなんつばらにかたせたまへば おぼつか
 なく思ひわたりしも 何も皆忘れはてゝ

濱千とりあと絶にしとらみしも

けふあひみればさらにくやしき

なほしばしとのたまへど けふは比喜多氏のまねかせたま

すでにちよふる心ちこそすれ

師の君のうたは前に有

八日よべは夜ひとよあめふりてけさはれたり 師の御もと
 に行て おぼつかなく思ふことなどとひ奉りて 夕つかた
 帰る また題三つ給はる

九日やどれる家あるじの盃もてきつれど 菊の花もなく
 あかぬこゝちして

よそへつゝくみやかはさんこの秋は

まだみぬきくの花のさかづき

ひるつがた此あるじのはゝ刀自ともなひて 安井なるこん
 びら権現の宮居にまうず こはわがもとつ国にあとたれま
 すおほん神を こゝにもうつしたてまつるなれば とり分
 てたふとくおぼしつゝ広まへにぬかづきて

たぐひなくたのもしきかなこゝにしも

わがうぶすなの神しいませば

きのふ給はりし題のうた

重陽に友をまつにこず

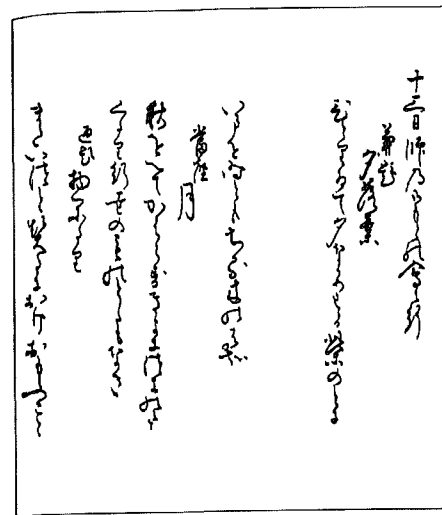
けふまちてひらきし菊のはえもなし
 みせばやとおもふ人しとはねば

あめのゝちのまつ

松の葉のいつとなけれどとりわきて
 あめの余波の露のぬれ色

野分にあひたるばせをば
あらかりし野分に夜たゞすまへばか
やぶれてたてる軒のばせをば

十日二条なる藤井氏の当座ことに 師の君にしたがひまゐ
らせて行べく契置しに よべよりいと寒きげにや いささ
か御こゝちあしとて とまり給へばわれも行ず成ぬ
十一日けふは先師の御忌日なり かの御影も拝ませ侍らん
かならずと師の君より御せう息あれば まかりて拝み奉る
むかふよりやがても落るなみだ哉
いますごとき君が御かげに



「たびのに記」 井上昌氏蔵

またの日寒さたへかたし けふは風のこゝちなればいづち
も行ず ひるつかた幸文とひきて いと久しうた物がた
りなどしてくるゝ頃かへれり こよひはこゝちあしければ
とくふしぬ
十三日師のきみの御もとに月なみのつどひごととなれば
風のこゝちもさはやぎ侍らねどまかる

兼題

山中秋興

紅葉がりあかでくれぬるみ山ぢの

かへるさおくるさをしかの聲

宇治里の月を

はし姫のまつよのどこにながむらん

月ふけわたるうぢの山さと

老菊こは通題也

いつしかと夜寒の霜をいたゞきて

翁さびたる庭のしらぎく

—後略—

岡山県倉敷市有城四〇五—二

TEL 〇八六—四二八—四九八〇

井上政子と「たびのに記」

宮口 公子

歴史的町並みが今に残る倉敷市美観地区、その中心地に
国指定重要文化財の井上家住宅がある。十八世紀初頭に建
設されたと伝えられ、倉敷の大規模な町屋に見られる特徴
をよくとどめた、立派な町家である。①

井上家は近世初頭から中期にかけて、村役人、地主とし
て倉敷の村政を主導し、現在の十五世昌氏まで、四百年に
わたって続く旧家である。

この井上家に明和六年（一七六九）に嫁いで来た、政子
という女性の書いた「たびのに記」を、六年前古文書講座
で読んだ。今年二月、倉敷市史編さん室で、同じ年に書か
れた、もう一冊の「上京日記」がある事を知った。

これは、びっしりと書き込まれた旅先きでの走り書きメ
モの様なもので、後に清書され、美しく調えられた日記と
比べてみると、字も読みにくく、和歌にも推敲の跡が多く
見られ、不明の箇所も多いが、非常に生き生きと書かれて
いるように思う。

又今回の調査で、倉敷市立中央図書館の『玄石文庫』②の
中から、手書きの「井上政子略年譜」を見つけることが出

来たので、もう一度、同じ時期に書かれた二つの旅日記を
比較しながら、政子の生涯を追ってみたいと思う。

政子（初名くが）は寛延元年（一七四八）讃岐の菅納家
六代、菅佐平太政甫の長女として生まれた。菅納家は寛永
五年（一六二八）備前（現在は岡山市）金川から讃岐へ移
り住み、金毘羅の別当寺である金光院の住職の下で実務を
執った役人の中で、上輩と呼ばれた町年寄として、代々続
いた家である。

明和六年（一七六九）二十二歳で、倉敷の井上善左衛門
永美（後、素堂と号す）の継室として嫁ぐ。夫素堂は井上
家八世・永俊の四男として元文五年（一七四〇）に生まれ
分家の花屋を継ぐが、兄達が若くして次々と亡くなった為
帰って宗家を継ぎ九世となる。倉敷市史③は「素堂は三十
六歳の時、はじめて和歌に志し、翌年香川木工景平の④門
に入り天明元年（一七八一）小沢蘆庵の⑤門に転ず」とあ
り、又「天明から天保にかけての六十年間における倉敷は、
和歌と漢詩が大に行われ、和歌は天明に至って頓に活気
を呈し、余勢延いて、明治初期に及んだ、而してその先聖
は、井上素堂であった」とその姿を伝えている。

明和六年（一七六九）妻を亡くした素堂の元へ嫁した政
子は、夫の指導で二十八歳の頃から、歌を詠み始めたが、
その翌年には二百二十首の歌が記され残されている。玄石

文庫の中にある「政子年譜」に「生来文学を愛好するも……」という記述がある事が気になり、金刀比羅宮を訪ねてみた。この宮には、円山応挙をはじめ数多くの文人墨客が訪れその人達が残した書・画、和歌その他沢山の宝物が所蔵されている。この恵まれた環境の中で、豊かな家に育ち、当時としては晩婚で、長い間親の元に養われた政子は、種々の習い事をし、教養も身につけていたことと思われるが、讃岐での彼女の生活については、何一つ知る事が出来なかった。

結婚当時二歳であつた血の継がらない息子常之を育てながら、財力に恵まれ、八歳年長の夫の指導で喜々として作歌に励む政子の姿が

さほ姫の手染の糸の青やぎを ふきな乱しそ春の川風という歌にも偲ばれる。又、政子は夫とともに「万葉集」「古今和歌集」などを学んだ様で、井上家の蔵書目録の中に二十数冊の万葉集研究書・三十数冊の古今集研究書が見られ、又政子が自ら写した「万葉集抄」も残されている。夫の素堂は、寛政三年（一七九一）五十二歳で、息子常之に後を託し隠居する。その四年後の寛政七年（一七九五）夫婦ともに京に上り蘆庵の門を訪ねている。この時政子が書いた「道の記」のある事が、井上家の記録の中に見えるが、その存在が現在不明であるのは残念である。二人の旅はさ

そかし楽しく、幸せいっぱいであつたろう。しかしその八年後、享和三年（一八〇三）政子五十六歳の時、夫が他界する。翌年夫の一周忌に政子が詠じた長歌と反歌がある。

長歌

あはれ世のうきには死なぬ物なれや 惜しけくもあらぬ露の身の かひなき跡にながらへて 常なきこの世うしとのみ なげきわびつゝ目の前に今をかぎりとは見はてつる 終の別のはかなさも 猶うつゝとはおもほへず ただ明暮にませませし世のことをあまたに思ひいでて 恋渡る間に涙川はやくも月日のうつりきてまたたちかへり新玉の春にしなければ あかねさす日かげのどかにてらせども 袖の氷はとけやらす 花薦の色音にもなぐさむべくもなきまゝに とともに見し夜のかたみぞと 向ふ月さへ折からの ならひにこえていとゞしく かすみはてつゝ有りにしも あらぬうき身の有りくゝて 猶幾春をへだつとも 忘るゝひまはあらじとぞ思ふ

反歌

限りぞと見しは夢ともたどるよに
その月日さへめぐり来にけり
夫を亡くした悲しみも癒えぬ文化二年（一八〇五）常之の養子、菊太郎が五歳で亡くなった。この孫を思い詠んだ

と考えられる歌が「萩亭集」に書きとめられている。

うまこの身まかりしころ 同じばかりのわらははべおのがじし遊ぶを ともしれば そよとのみ驚かれつゝ

秋の野の花くらべむと掘りにかも

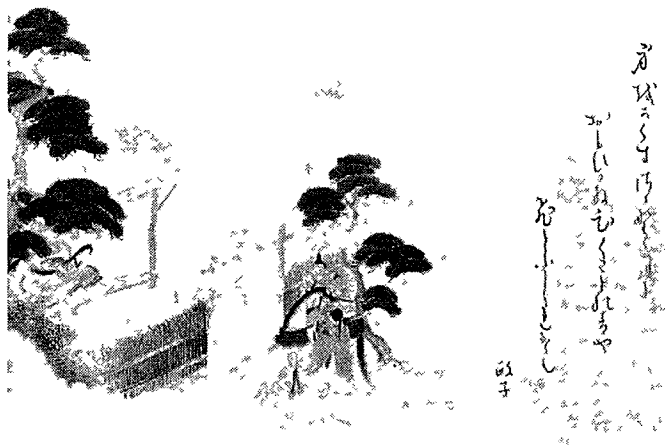
むしとりにかも行きてかへらぬ

政子の歌は 美しく調えられた古今調の歌が多く、生活や心情を生々しく詠んだものは少ないように思うが、亡き孫を思うこの歌からは、政子の深い悲しみが、切々と伝わってくる。夫との間に子を成さなかった政子の、悲しみにくれる姿を側で見ていた息子の常之が、母を慰める為に誘ったか、文化四年（一八〇七）の秋「常之にともなはれて」京に上る。この時の日記が「上京日記」と「たびのに記」である。「いざ給へとて常之にいざなはれて四条の河辺をうかれ行くに……」という文章に、六十歳の政子の少女の様にうきうきとした姿が見える様ではないか。

又、この旅では先師小沢蘆庵のあとを訪ね、蘆庵の弟子で現在の師小川萍流②のもとを訪い、木下幸文③、前波黙軒④、田山敬儀⑤等とも交り、歌を詠み合つて心豊かな京都の日々を過している。倉敷へ帰って後も優しい常之に見守られ幸せに過したのであろう。政子の詠草は五十代後半から急増している。常之（号 端木）は甚だ多芸、ことに鶴の絵が得意であり、又笛の名手でもあつた。さらに能

や蹴鞠、和歌、書もよくした風雅な人物であつた。常之の画に政子が和歌を添え書きした美しい作品⑥が井上家に残されていて、母と子の寄り添う姿を思わせる。

幸せな晩年を過した政子は、文化九年（一八一二）三月十日六十五歳で夫のもとへ旅立って行った。



端木絵 政子和歌 井上昌氏所蔵

政子亡き後常之は母の残した歌を集めて歌集「萩亭集」をまとめている。二歳で生みの母と死別した常之をいつくしみ育ててくれた母への感謝の気持ちであろう。この歌集には師の小川萍流が心の籠った跋を寄せている。

二人の墓所は、井上家のすぐ北側の鶴形山の一面にある。ここは井上家六世の当主（素堂の父）が独力で建てた玉泉寺^③という寺のあった地であり、「早創以来、名僧相つぎ倉敷文化に一異彩を放った」と市史にあるように、倉敷の文化の中心でもあった。

晩春の一日、十五世の御当主、昌氏に御案内をいただき素堂夫妻の御墓所に詣でた。紅と白の花を一ぱいに付けた数本の藪椿の下に、寄り添うお墓の前には、息子常之とその妻貞子（歌人）のお墓があり、井上家の立派な墓を眼下に見て、仲良く家族で語り合っているような、心暖まる墓所であった。

[註]

(1) 平成十四年六月一日発行「公報くらしき」による。

井上家住宅は、平成十五年六月から公開されている

(日曜日に限り)

(2) 『玄石文庫』一九六四年倉敷市立図書館が、永山卯三郎の収集した書籍六千五百五十四冊をはじめ、古文

書・記録・写真・考古資料など総計一万一千点の寄贈を受けて発足した文庫。内容は明治から大正・昭和にかけての歴史・考古学関係を中心に、広く集められたものである。

永山卯三郎（一八七五～一九六三）地方史研究家、

岡山師範学校教諭、県下をくまなく歩き、文献・金石文・考古・民俗資料・史跡などを精力的に調査研究した。著書は「池田光政公伝」「岡山県通史」「岡山県金石史」「岡山市史」「吉備郡史」「倉敷市史」など多数。

一九五二年岡山県文化賞を受賞。号 玄石

(3) 『倉敷市史』一九六四年、永山卯三郎編集により二十一巻と別巻一冊を刊行。さらに一九七三年、名著出版より復刻刊行されたもの。

(4) 香川景平 江戸時代中期の歌人、享保七年京都に生る。父香川景新に就き和歌をよくす。寛政元年四月没。

(5) 小沢蘆庵（一七二三～一八〇二）江戸時代中期の歌人。尾張の人、犬山藩士。のち京都に移り住む。和歌を冷泉為村に学ぶ。皇学、漢学にも精通し、尊皇の心を抱いていた。その和歌は才気煥発、当時、伴蒿蹊

澄月 慈延と並んで、平安四天王と称せられた。

(6) 『萩亭集』政子の死後、常之が母の和歌二百七十三首と随筆三編を集め編集したもの、師の小川萍流が跋

を寄せている。

(7) 小川萍流（一七五六～一八二〇）江戸時代中期の国学者、京都の人。和歌を小沢蘆庵に学び、その門下の四天王の一人といわれた。著書に『雅俗辨』。

(8) 木下幸文（一七七九～一八二二）江戸時代後期の歌人。夢園・朝三亭・亮々舎と号す。備中国浅口郡長尾村に生る。小野榛翁に歌才を認められ、その勧めによつて上京、香川景樹に入門。熊谷直好と並んで世に桂門の双壁と称された。著書は「さやさや草紙」三巻。遺稿「万葉集註釈」「古今集註釈」「木下幸文日記」二九冊がある。

(9) 前波黙軒（一七四五～一八一八）江戸時代中期の歌人、蕉雨園と号す。但馬国豊岡の人。京都に出て医を業とす。小沢蘆庵の門に入り、その四天王の一人と呼ばれる。歌集は「蕉雨園集」

(10) 田山敬儀（一七六六～一八一四）江戸時代中期の歌人、源姓 元良 号を淡斎という。伊賀上野の人。幼少より学を好み、山崎闇斎に私淑して儒学及び書を能くし、後京に出て小沢蘆庵の門に入り歌学を修め、蘆庵門の四天王と称された。著書に「百人一首図絵」「詞の玉苗」がある。

(11) 井上昌氏所蔵。

(12) 玉泉寺 井上家六世永俊が独力で建てた寺で、倉敷

の文化の中心となっていた。幕末（慶応二年）の倉敷騒動で代官所が焼失し、代官所内にあった明倫館が役所になったため、井上氏がすべてを寄付して、玉泉寺が明倫館となり、後に郡役所となった。

[参考文献]

『倉敷市史』 永山卯三郎編 名著出版 一九七三年

『町史ことひら』

『萩亭集』 井上端木編

『岡山県歴史人物事典』

『岡山県大百科事典』

『日本人名大事典』

『井上家目録』

終りに

井上家の貴重な資料の拝見をお許し下さいました御当主昌様、お教えを賜りました金刀比羅宮の山本健様、倉敷市立図書館小野敏也様、倉敷市史編さん室の山本太郎様に厚く御礼申し上げます。

岡山県倉敷市倉敷ハイツ 十一一二
TEL 〇八六一四二九一一三八九